

宣長サミット 基調講演

「現代に生きる宣長—伊勢志摩サミットのレガシーとして」

一般財団法人日本総合研究所 会長 寺島実郎

寺島でございます。鈴木英敬知事とのご縁で、三重とは一段と関係が深まっています。特にこの3年間、三重の企業を率いている経営者の方たちを対象に「MIE 戦略経営塾」というものを、三重大学の西村副学長と一緒に開講しました。そういう意味でも三重に対して大変深い共感を持っています。

私は、いろいろ講演を頼まれる際に、テーマはトランプ政権をどう評価するか、北朝鮮問題にどう対峙するか、というようなものが多いのですが、今日は、宣長サミットということで、普段とは違うお話をさせていただきます。皆さんに配られている資料の中に、私が書いている「本居宣長とやまごころ」という論稿があります。私は、岩波書店の『世界』という雑誌に、15年以上連載を続けているのですが、今「17世紀オランダからの視界」ということで、我々が生きている近現代史というものを根底から考え直してみようとしているのです。17世紀のオランダというのは、近代の揺籃期みたいな時代で、例えば、最初の資本主義の原型と言われた株式会社が、東インド会社という形で生まれたのも17世紀オランダ。近代思想の原点にあるデカルトが活躍していたのも17世紀のオランダ。さらに、近代科学技術といった類のものも繰り広げられた。そのオランダと日本は江戸なる時代に長崎の出島で向き合っていたわけです。江戸なる時代の日本の知というものが一体どういうものだったのかということ、江戸の正学と言われた儒学はあくまでも中国の学問です。それに対して、国学、そして蘭学事始の蘭学と江戸の知のつながりをフォローしようと、私、鈴屋にも何回も足を運んで、本居宣長について深く考えてみました。

今日の企画は、なかなかよく考えられていまして、私は前座のようなものですけれども、この後、「今、なぜ、宣長か」ということで、池田雅延さんがコーディネーターをやられます。僕が本居宣長に向き合うと、必ず通過しなければならないのが、小林秀雄であり、吉川幸次郎です。池田さんはまさに、その小林秀雄と正面から向き合って編集者として新潮社を支えておられた時代がある。そういう方がコーディネーターになって、記念館長の吉田悦之さんをはじめ、まさに宣長をプロとして分析してきたような方が、私の話の後を引き継いでくれますので、私の役割は皆さんが若干視界を広げて宣長を捉えるための大きな構図みたいなものをお話しすることかなと思っています。

先ほど、知事が話されたように、昨年三重で伊勢志摩サミットがありました。私は、これをグローバルな世界の動きに対して三重の人たちが大きく視野を開くチャンスにしていけないといけない、というふうに思っています。グローカリティという言葉があるのですが、私の言いたい事を一言で集約するな

らば、このグローカリティでして、つまり、ローカルな重心の低さが、グローバルな世界を見抜くには絶対に必要だ、というのが私自身の考え方にあります。どういふことかと言うと、例えば、ここ三重の地域の歴史に真剣に向き合えば向き合うほど、逆に世界との関連が見えてくるわけです。グローカリティはグローバルという言葉とローカルという言葉のパッケージにした造語です。伊勢志摩サミットのレガシーを三重が残していくために、こうした企画を通じて、地域の歴史と世界の歴史との相関を絶えず理解し、深めることが、この地域での歴史ツーリズムの基盤をつくっていく。つまり、先ほど文化庁の松坂浩史事務局長からお話がありましたけれども、観光に力を入れるにも、やっぱりその根底にある哲学、思想がものすごく重要です。そういう意味で、グローカリティを、まず基軸の問題意識、キーワードとして、申し上げておきたいと思いません。

そこで、本居宣長が生きた時代というのを、ちょっと柔らかい頭で思い出してみたいのです。三重出身の大黒屋光太夫と本居宣長は、ほぼ同世代を生き抜いたと言っていいような人です。ご存じのように、大黒屋光太夫は、白子から船出して太平洋を漂流して、1782年にアリューシャン列島に流れ着いた。そこから、なんとユーラシア大陸を横断して、現在のロシアのサンクトペテルブルグまで連れて行かれて、エカテリーナ2世という女性の皇帝に面会し、1792年にロシアの使節という形で開国を求めてやってきたラックスマンとともに根室に帰ってきます。私の故郷は北海道です。日本人は、1853年のペリー浦賀来航あたりから日本近代史は始まったのだ、と繰り返し認識を深めていますけれども、実は、アメリカが接近してきた頃よりも半世紀以上前にロシアが北から揺さぶってきたのです。当時幕府を実質的に率いていた松平定信は、ラックスマンの来訪に対して時間稼ぎをしておりまして、その後、長崎にレザノフがやってきたのが1804年です。本居宣長が亡くなったのは1801年です。大黒屋光太夫は日本に帰ってきた後、一般的には幕府が情報を封印するために幽閉したというふうに伝えられていますけれども、調べると、1802年に一度、伊勢に帰ってきています。つまり、まさに、本居宣長が亡くなった翌年ですね。大黒屋光太夫は一度江戸から伊勢に帰ってきて、伊勢若松村というところに2ヵ月滞在し、伊勢神宮にお参りもしています。このように北からロシアが揺さぶってきたような、江戸幕末にかけての、ある種の揺らぎの時代に、本居宣長は、まるで定点座標のように鈴屋で世界を睥睨（へいげい）しながら、『古事記伝』に立ち向かっていました。『古事記伝』の完成が1798年ですから、まさにその時代に彼は鈴屋で生きていたのだな、と感慨を覚えます。

本居宣長をどういう風に評価するか、という話は後半により深まるだろうと、私は期待していますが、私の論稿の中に読み取っていただきたいのは、本居宣長は、日本を発見した人物、日本人が日本を意識するという意味におい

て大変大きな役割を果たした人物だということです。というのは、まさに江戸の正学と言われていたのは儒学です。日本という国は、「からごころ」といいと思うのですが、中国の文明、文化にどっぷりと影響されてきた国なのです。つまり2000年に渡る歴史の中で、日本という国は中国の文明、文化の影響をいかに受けてきたか、ということです。

我々は江戸の時代を鎖国の時代と呼びます。鎖国というと、西欧社会に対して鎖国していた、というイメージが先行しますが、実は、別の言い方をすると、この江戸なる時代というのは、あまりにも影響を受け続けてきた中国からの文明、文化的な自立のプロセスだったと言ってもいいと思います。例えば、1670年頃まで、つまり江戸という時代が始まって6、70年経つまで、日本の庶民が使っていた通貨はほとんどが中国の銭でした。日本人はそのあたりのことを十分に理解できていませんが、日常的に庶民が使っていた銭の9割は、永楽通宝に象徴されるような中国の銭だったのです。

織田信長の旗印は何だと思えますか？織田信長は命がけで戦っている織田軍団のロゴマークを永楽通宝のマークで戦っていたわけですね。彼にとって、明の永楽帝というのは、非常にポジティブなイメージであり、永楽通宝というのは良貨、要するに非常にポジティブなイメージだったから、命がけの戦いで自分のマークに日本の通貨じゃない永楽通宝を選んだのです。永楽帝は織田信長より100年以上も前を生きていますが、そういう文化、文明を引きずっていた、ということです。江戸時代になって、寛永通宝という通貨が発行されて、1670年に江戸幕府が外国の通貨を使ってはいけない、という古銭禁止令を出しました。そこからが銭における、日本の自立のプロセスですね。日本人は昔から日本の通貨を出していた、というふうに思い込んでいますけれども、江戸の初期までは、庶民の生活に浸透していたのは、9割以上、中国の通貨だったのです。

さらに、17世紀の半ばまで800年に渡って日本の暦というのは、中国の暦が定着していました。数年前に映画になりましたけれど、渋川春海が和暦をつくったのは17世紀に入ってからです。銭や暦のみならず、日本は、遣隋使、遣唐使の時代以来、漢字という字を使い、あらゆる面で中国の文明、文化の影響を受けながら、正学として儒学に向き合っていた時代に、国学としての本居宣長が登場してきたことをよく考えるべきだと思います。

本居宣長が果たした役割は、時代の固定観念から脱却し、ある種の自由人として、時代の変革者として、日本人自身の価値観やものの考え方というのは何かということ、深く静かに掘り下げて探究したことです。国学というと、極めて保守的なイメージを描きがちですが、実はそうではなかった。例えば、今にアナロジーをとるならば、私自身、今年の夏もアメリカ東海岸、西海岸、欧州、アジア、ついこの間、モンゴルまで動いてきましたけれども、海外の人と議論すればするほど、戦後の日本を生きてきた人間は、本人がどこまで

意識しているかは別にして、いつの間にか、アメリカを通じてしか世界を見ないという価値観を染みつけています。そういった時代状況の中で、自分の自立したものの見方や考え方をつくるということが、いかに難しいか。本居宣長は儒学という価値観で凝り固まっていた時代に、日本人のものの見方や考え方がどうあるべきか、ということを示唆しました。それが、「からごころ」から「やまとごころ」へ、という、まさにキーワードなのです。

からごころの「から」というのは唐、中国という意味です。からごころで固まった時代に対して、やまとごころというものを示唆したということが、私が宣長を、日本を発見した人物という言い方をしている理由です。私は、知というのは物事のつながりを探究することだというふうに思っていますので、日本人が日本人であることを意識した歴史というものを調べており、そこで、本居宣長という人の源流にどういうものが存在しているかを調べています。

鎌倉時代にモンゴルが2度日本に攻めてきた元寇は、みなさんご存じだと思います。フビライですよ。2回の元寇を通じて、日本人が日本人であることを意識し始めた。その脈絡の中に、宣長も立っていることを確認するために、この議論をしておきます。

文永の役では鎌倉時代の1274年にモンゴルと朝鮮半島の高麗軍が博多湾にやってきました。弘安の役では、文永の役の7年後の1281年に、今度はモンゴルが南宗つまり中国の中心部を攻め滅ぼしてから、南宗と高麗軍の連合軍という形で、さらに腰を入れて14万人が日本にやってきました。この頃の日本は、鎌倉幕府といえども、例えば九州に対してできなかったように、全国を統治しグリップするような権威威光まではなかった。けれども、ものすごく健闘した。九州の御家人なんかは結束を固めてモンゴル軍に対して戦いました。そのプロセスを通じて、例えば、北畠親房が『神皇正統記』で南朝の正当性などを書きました。外敵が襲ってくるという状況の中で、日本人が日本であることを意識し始めたのです。大変大きな転機となった出来事が、モンゴルが攻めてきたことだったのだな、ということを感じます。日蓮が鎌倉幕府に対して、立正安国論というものをぶつけて、外敵が攻めてくるという危険性をいち早く提起しました。北畠親房や日蓮という存在が、日本人が日本を意識した瞬間、その萌芽とっていいだろうと思います。

外とのつながりの中で、日本人は自分が日本人であることを意識する。私も、海外を動けば動くほど、あらゆる意味で、自分が日本人なのだ、ということを感じます。外との、ある種の知的、文化的、緊張関係の中で、自分のアイデンティティを確立する。それは、世界に共通することです。例えば、7世紀に生まれたイスラムが715年にはイベリア半島を制圧して、今のフランスに攻めこもうかという勢いになった。フランク王国を束ねていた王がキリスト教共同体としての欧州というものを初めて意識して、イスラムにピレネーを越えさ

せないために戦った。そのあたりから、欧州はキリスト教共同体としての意識を踏み固め始める。つまり、外部との緊張感の中で、自分のアイデンティティというものに気づき始めるということですね。

そういう流れの中で、私は本居宣長が、「からごころ」から「やまごころ」へ、というところに立っている、と申しあげましたけれども、もう1点、実は、本居宣長が生きた時代は、蘭学事始の時代でもあったのです。つまり、杉田玄白の『蘭学事始』は1815年に出ていますが、『解体新書』が翻訳されて、登場してきたのが1774年ですから、まさに宣長が生きていた時代は蘭学というものが動き始め、花開き始め、突き上げ始めた時期です。私は本居宣長を調べれば調べるほど感じておりますけれども、彼は偏狭な地域にだけ視界をとった人物ではないということをつくづく思います。彼は、医者でした。薬師（くすし）と自分で呼んでいた。ですから、医学という世界にどのような動きが起こってきているか、関心を持っていなかったはずがない。蘭学が覚醒して、交流していく時代に、彼はこの地にあって、薬師として、自分の立ち位置をしっかりと守っていたのだ、ということに気が付きます。ですから、さっきの話と結び付けていただきたいのですが、大黒屋光太夫がロシアから帰ってきた状況と、蘭学事始がまさに動き始めた状況を背景にしながらか、やまごころと日本というものに向き合っていたというところに、彼の立ち位置の重要性があると思っています。

全くつまらない余談ですけれども、杉田玄白も結構生真面目な人で、記録に残っているのですが、蘭医者、西洋の医者としての彼の人生における収入のピークは1803年、つまり宣長が死んだ2年後で、年間643両も稼いでいます。本居宣長も生真面目な人で、すべて記帳していて、その年にいくら収入があったかなんてことも全部残っているのですが、本居宣長の収入のピークは1781年で、96両でした。つまり、両者はある意味では安定した生活基盤を持っていたとも言えるわけです。杉田玄白は、宣長よりも20年後だけれども、643両も稼いでいたとんでもない人だな、とったりもします。そういった類の関心を含めて、宣長に生身で迫ってみるというのは、おもしろいな、と思っているわけです。

本居宣長について2つめの私の理解のポイントは、「もののあはれから古学へ」です。本居宣長が日本についての考えを深めていく、その最初のきっかけは『源氏物語』なのです。彼自身が若いうちから歌学にも非常に長けていた人でした。当時の金科玉条のような儒学的価値観から言えば、『源氏物語』なんて女好きの貴族のふしだらな生活、なんだよこの話は、と言いたくなるような価値が紊（びんらん）したような世界の物語に聞こえます。ところが、本居宣長は、『源氏物語』の脈絡の中に人のこころの機微、「もののあはれ」を見抜いていた。ここからが彼の真骨頂という気がします。私のこの「本居宣長とやまごころ」という論稿は、あまりにもコンパクトにしていますが、これを書くためにノー

ト 1 冊くらい作りました。その中で、宣長という人は人間の深い意識を嗅ぎ取って行く力を持っていたのだな、とつくづく感じられました。『源氏物語』に描かれている世界観の中から、人の心の深さを感じ取った彼の力というのは、すごいな、と思います。

というのは、今、私が、極めて関心を持っている領域が人工知能なのです。私はBS11 というチャンネルで、毎週金曜日の夜 9 時に、鈴木英敬知事も出ていただいたことがあるのですが、「未来先見塾」という番組を続けています。時代のキーパーソンと対話している番組の中で、人工知能の専門家に出演いただいて、話を深めているのです。というのは、ご存じのようにシンギュラリティという議論が出てきていまして、2045 年には人工知能が人間の能力を越えるところまで発達していく、と。将棋でも、囲碁でも、人間が人工知能に敵わなくなっているということは、皆さんも感じ取っていると思います。

ただし、人工知能というものは、コンピュータです。どんなに逆立ちしてもコンピュータにできないことがあります。コンピュータは認識する力、英語で言うと recognize です、これを高めることはできます。しかし、コンピュータは意識 consciousness を持てないのです。「もののあはれ」というのは、意識なのです。

AI を議論している本に目を通していますが、イタリアのある専門家がとてもおもしろい説明をしています。1969 年にアポロ 11 号で月面に降り立った 2 人の宇宙飛行士のことを例に AI を説明しています。2 人の宇宙飛行士が振り返ると、月面の彼方に地球が昇ってくる姿が見えたのです。その時、感動して涙が出た、というわけです。今地球が昇ってきているとか、何がどう動いているかはセンサー能力のようなコンピュータの能力を高めていけば、認識力を高めることができる。コンピュータというのは目的手段合理性ですから、目的に対する手段の合理性の選択においては圧倒的力を発揮するでしょう。しかし、振り返った瞬間に、感動して涙が出るというのはコンピュータにはできないわけです。なぜかというと、人間の脳みそは 1.5 kg しかないのですが、その脳みそのシナジーの中で、例えば、故郷地球の母親の顔や友達顔を思い出して、いろんな思いが一気に込み上げてきて、涙が出る。そういう意識がコンピュータには生まれません。目的手段合理性を越えた、意識の深さというものを、どこまで理解できるかが「もののあはれ」なのです。

仏教の議論の中に九識という議論があるのですが、五識、目で見るとか、鼻で嗅ぐとか、そういった認識を越えて、深いところで人間の美学とか生きる価値や命の価値、というものを感じ取る。人間って、目的手段合理性だけで動いているわけではないのです。例えば、愛する者のためには、自己犠牲してでも、自分が死んででも守る、といった人間の意識をどこまで深く感じ取っているかが、文化の深さだと思います。そういう時代において、宣長は、「もの

のあはれ」から古学に入っていった。『日本書紀』のような漢字で書いた書籍ではなく、『古事記』に着目して、日本人の本来的な「もののあはれ」って一体何なのだろうか、と考えた。そこに私は本居宣長の真骨頂があるのだろうか、というふうに思います。

私が非常に本居宣長に惹かれるポイントの3つ目です。鈴屋に行ったときに、なるほどと思ったのは、彼は世界地図を入手して、世界地図を見つめていたのです。ですから、間違っても偏狭のナショナリストではないわけです。井の中の蛙でもない。つまり、世界への視界を絶えず意識しながら、彼は筋道の通った日本というものを求めようとしていたことがひたひたと伝わってきます。本居宣長に対しては、ものすごく勤勉実直で、鈴屋に閉じこもって、というイメージがありますが、彼は5年間京都に遊学していた時代があります。彼は朝鮮通信使が京都を通過していく姿や、長崎の出島の商館長が江戸参府でほぼ毎年上洛してくる姿を横目で見ながら、世界というものに対する強い問題意識を持っています。要するに、内に向かって閉鎖された人ではないわけです。ここが、私はものすごく重要だろうと思います。

余談になりますが、本居宣長はすごいマザコンなのですね。お母さんからの手紙が68通ほど残っているらしいのですが、京都に遊学した時に、お母さんが1両送金してくれています。手紙には酒はあんまり飲んではいけないとか、いろんな垂訓が書いてあったりするのですが、母の手紙を大事に残しながら生きていたのだな、と考えると、やっぱりお母さんの存在というのは、いかなる時代においても重いな、と、いろいろな複雑な思いをしながら宣長を見つめています。

そんなことで、「本居宣長とやまごころ」という論稿の中に、私の思いを込めています。宣長は、非常に不幸なことに、戦前と言われた時代に、戦争に向かう日本において、「敷島のやまごころを人とはば朝日ににほふ山ざくら花」という歌を軍国日本のシンボルとして祭り上げられてしまった部分があって、彼自身の持っているヒューマニティやグローバリティが誤解されている部分があったと思います。しかし、このスケール感と人間というものを見つめる深さは、たぶん、日本の歴史の中でも比類がないものを持っているように思います。

そんなことを申し上げて、私の時間が来てしまいましたので、あとは池田さんをはじめとするプロの方々の宣長に対する見方を十分に吸収されることを期待して、話を終えておきます。どうも、ご苦労さまでした。